1910年の本邦初演以来、日本で愛されているゴーリキーの名作

【芸術監督】小川絵梨子

【演出】五戸真理枝

立川三貴

廣田高志

高橋紀恵

瀧内公美

【チケット好評発売中 ☞ 新国立劇場ボックスオフィス 03-5352-9999】

写真・資料のご請求、取材のお問い合わせ

◎新国立劇場 制作部演劇 広報担当

TEL: 03-5352-5738 / FAX: 03-5352-5709

◎新国立劇場 制作部演劇 制作担当

TEL: 03-5352-5736

新国立劇場
NEW NATIONAL THEATRE TOKYO
http://www.nntt.jac.go.jp

◎作品について

芸術監督・小川絵梨子の掲げる「ことぜん」とは
2019/2020シーズンの幕開けはこの「ことぜん」シリーズ3本からスタートします。「ことぜん」とは個と全という意味合いで、個人と国家、個人と社会構造、個人と集団の持つイデオロギーなど、「一人の人間と一つの集合体」の関係をテーマとしています。 閉塞感ある全体主義やその圧力に取り込まれる「個人」。しかしながらその「個人」が集まり「全体」を創りだしてしまう.....。そんな切っても切れない個と集合体の関係性や、相互作用、その中での軋轢や葛藤を、三人の演出家がそれぞれの作品でそれぞれの視点から描きます。
上演作品は日本初演作品を含み全て新翻訳です。演出にはそれぞれ新国立劇場初登場の五戸真理枝、瀬戸山美咲を迎え、さらに芸術監督の小川絵梨子も担います。

シリーズ「ことぜん」Vol.1

2019/2020 演劇シーズン、シリーズ「ことぜん」の第一弾は、ロシアの作家ゴーリキーの『どん底』を上演します。
この作品は我が国の演劇界において、1910 年(明治 43 年)に『夜の宿』と題して初演されて以来、百年を経た現在でもたびたび上演され、数々の名舞台を産み出してきた名作です。母国ロシアでの初演が 1902 年だったことを鑑みると、そのわずか八年後の日本初演も画期的であれば、その後上演され続けてきたことも驚異的で、我が国で最も愛された海外戯曲のひとつと位置付けることも可能です。
その、いわば慣れ親しんだ戯曲に果敢に挑むのは、文学座の新鋭、五戸真理枝です。小川絵梨子監督の「ことぜん」の企画に対して、五戸は『どん底』という作品の中に「社会と人間」というテーマを見出し、新しい視点でその本質を突こうとしています。
若い感性で描く 21 世紀の『どん底』にご期待ください。

◎あらすじ

20 世紀初頭のロシア。社会の底辺に暮らす人々が集う木賃宿。様々な職業の人間が暮らしている。
早春。それぞれが思い思いの朝を迎えていた。商売道具の手入れをする者、まだ寝ぼけまなこの者、病に臥せっている者、そして他愛もない無駄話に興じている者。また、きょう一日が始まったのだ。
そんないつもと同じ日常にひとつの波紋が訪れる。新しく住人になった巡礼、ルカが現れたのだ。60歳を越えたこの男は事あるごとに、住人に「説教」を垂れる。虚実判然としないその「説教」はほかに行き場のない彼らの福音となるのか、或いは絶望をもたらすのか。
やがて、住人たちの間に些細な軋轢が生まれ、ひとつの事件が起こる…。

◎翻訳　安達紀子からのメッセージ

『どん底』は、マクシム・ゴーリキーが1901年冬から1902年春にかけて書き上げた彼の代表作である。幼少のころより貧困のなか、自らの労働によって生計を立てなければならなかったゴーリキーは、職業を転々としながら、社会の下層に生きる人々の暮らしを目の当たりにし、自らもそのような暮らしの中に身を置いていた。ゴーリキーはペンネームであり、ロシア語では「苦い」という意味の形容詞でもある。

『どん底』の登場人物たちはゴーリキーの体験の中から、作家の創造のフィルターにかけられつつ生まれ出てきたのだろう。彼らは「過去」を失った、虐げられた、社会に受け容れられない人々である。ひとりひとりの人物が自らの「どん底」の中で喘ぎ、それぞれの問題を抱えているが、すべての人物を覆いこむ巨大な、深い「どん底」の存在が感じられる。

『どん底』には、「人間とは何か」「真実とは何か」「良心とは何か」といった根源的な問いかけが存在する。真実も、嘘も多様な意味を帯び、人物たちのセリフの中で交錯し、ときには混沌として混乱を招く。ルカの優しい、真実であってほしいと思わせる言葉も、サーチンの耀かしく金字塔のように聳える人間讃歌の言葉も、結局は人を救うことができない。それでも、耳に残る言葉、それなのにどん底の暗闇に虚しく消えていくかのような言葉。救いはどこにもなく、問題は永遠に解決されないのだろうか？　『かもめ』のトレープレフの自殺を思い出させるような俳優の自殺。恐ろしい悲劇をたっぷり孕みながら、ブラック・コメディの鏤められたこの戯曲は、現代の日本と無関係ではない。私たちひとりひとりにも自分自身の「どん底」が存在すると同時に、人間という存在そのものをすっぽり覆ってしまう「どん底」は今を生きる私たちにも共通のものなのだから。

◎演出　五戸真理枝からのメッセージ

人間社会はつねに、速やかで清潔で安全な社会を理想として、それを目指して動いていくように感じます。けれど生物としてのひとりひとりの人間は、必ずしも速やかで清潔で安全な存在ではありません。この理想と現実の矛盾を抱えこんだまま、人間社会はどこまで速やかさ清潔さ安全さをつきつめていくことができるのでしょうか。私は2010年代末の先進国日本で、なるべく安全な大人として生きて行こうと努力している一人ですが、最近は先進国家の理想の未来像というものは崩れてしまっているように感じます。そして我々の社会の次の目標地点はどこにあるのか、はっきりとは見えていません。

迷える日本人の一人としての私は、ゴーリキーの『どん底』に忘れかけていた重要なことを見つけたような気持ちになり、やすらぎとちょっとした希望を感じます。登場人物たちが、全体のストーリーに奉仕することなく個人的動機を貫き通して、自分勝手に動いていく構造を持ったこの戯曲には、清潔でも安全でもない生々しい現実の人間の姿が描かれていて、その生々しさは書き下ろされてから100年以上経た今でも新鮮に目に映ります。私は可能な限り繊細に人間の姿に迫ってみたいと思います。そしてゴーリキーの残した人間賛歌を舞台上に再び鳴り響かせてみたいと思います。そうすることで、社会の理想とは何か、個人の幸せとは何かということに生々しく思いをはせることが出来るような上演を目指します。

◎スタッフプロフィール

安達紀子 （ADACHI Noriko）

早稲田大学大学院博士課程（露文専攻）修了。ロシア演劇研究家、翻訳家、通訳。早稲田大学、慶應外語、桜美林大学オープンカレッジ講師。著書に『モスクワ狂詩曲』、『モスクワ綺想曲』（小野梓芸術賞）、『ロシア　春のソナタ、秋のワルツ』、『ゲルギエフ――カリスマ指揮者の軌跡』ほか。翻訳にチェーホフの『三人姉妹』。共訳にスタニスラフスキーの『俳優の仕事』（日本出版文化翻訳賞）。ロシア文化省よりプーシキン記念メダルを授与。

五戸真理枝 （GONOHE Marie）

1980年、兵庫県生まれ。早稲田大学第一文学部演劇映像専修卒業。卒業後はフリーターをしながら小劇団を旗揚げする。2005年、文学座附属演劇研究所に45期生として入所。2010年、座員昇格。演出助手などとして座内の多数の公演に関わる。
16年文学座アトリエの会、久保田万太郎作『舵』で初演出。ほかに『年あらそい』『三人姉妹』『阿修羅のごとく』などを演出している。演出助手としては『娼年』『食いしん坊万歳！　正岡子規青春狂詩曲』『チック』『坂の上の家』『管理人』『中橋公館』『岸 リトラル』などに参加。新国立劇場では『城塞』『オレステイア』の演出助手を務める。
演出の他、戯曲や童話の執筆も手掛ける。

◎出演者プロフィール

立川三貴 （TACHIKAWA Mitsutaka）

1975年、演劇集団円の創立に参加。2019年春退団。これまでの主な出演に映画『その後の仁義なき戦い』、ドラマ『怪人二十面相と少年探偵団』『十三人の刺客』など。声の出演では、映画『スパイダーマン』をはじめとするJ・K・シモンズの吹替え、アニメ『NARUTO　疾風伝』などがある。舞台『あわれ彼女は娼婦』『壊れたガラス』『誤解』では演出も手掛けた。
［主な舞台］『ブラッケン・ムーア～荒地の亡霊～』『どうぶつ会議』『アマデウス』『紙屋町さくらホテル』『1789　バスティーユの恋人たち』『奇跡の人』『スウィーニー・トッド』『死と乙女』『兄帰る』『ワーニャ伯父さん』など。新国立劇場では『ヘンリー五世』『ヘンリー四世』『リチャード三世』『ヘンリー六世』に出演。

廣田高志 （HIROTA Takashi）

文学座所属。1988年、外部作品『マクベス』で初舞台。以降も舞台を中心に活動し、劇団作品にとどまらず蜷川幸雄演出作品、幹の会作品はじめ、大劇場から小劇場まで幅広く多数の外部の作品へも出演している。
［主な舞台］『クイーン・エリザベス-輝ける王冠と秘められし愛-』『ヘンリー五世』『オセロー』『屋根の上のヴァイオリン弾き』『アマデウス』『フォルケフィエンデ-人民の敵-』『トロイラスとクレシダ』など。

高橋紀恵 （TAKAHASHI Norie）

文学座所属。1990年、『グリークス』で初舞台。以降、劇団作品のみならず外部作品でも主要な役で存在感を発揮している。また映像、ラジオドラマなどでも活躍。1994年、『マイ　チルドレン！マイ　アフリカ！』で第29回紀伊國屋演劇賞個人賞。
［主な舞台］『リア王』『三人姉妹』『この子たちの夏　1945 ヒロシマ・ナガサキ』『最後の炎』『アンチゴーヌ』『ボクが死んだ日はハレ』『青べか物語』『兄おとうと』『カエサル』『シラノ・ド・ベルジュラック』など。新国立劇場では『野望と夏草』『サド侯爵夫人』に出演。

瀧内公美 （TAKIUCHI Kumi）

2012年、本格的に女優としての活動を開始し、オーディションで映画『グレイトフルデッド』の主演を射止める。2017年、映画『彼女の人生は間違いじゃない』では日本映画プロフェショナル大賞新人女優賞、全国映連賞女優賞を受賞。ほか、主な出演作に映画『火口のふたり』『21世紀の女の子「Mirror」』『ここは退屈迎えに来て』『日本で一番悪い奴ら』『闇金ウシジマくん　Part3』『さよなら渓谷』、ドラマ『凪のお暇』『ゾンビが来たから人生見つめ直した件』などがある。
［主な舞台］
『オアシス～僕らのいるべき場所～』『阿呆の鼻毛で蜻蛉をつなぐ』『女の平和』に出演。

◎公演概要

【タイトル】　どん底

【スタッフ】
作：マクシム・ゴーリキー　翻訳：安達紀子　演出：五戸真理枝
美術：池田ともゆき／照明：阪口美和／音楽監修：国広和毅／音響：中嶋直勝／衣裳：西原梨恵
ヘアメイク：川端富生／アクション：渥美　博／演出助手：橋本佳奈／舞台監督：有馬則純

芸術監督　小川絵梨子
主催　新国立劇場

【キャスト】
立川三貴　廣田高志　高橋紀恵　瀧内公美
泉関奈津子　堀　文明　小豆畑雅一　伊原　農　鈴木亜希子　谷山知宏　采澤靖起　長本批呂士
クリスタル真希　今井　聡　永田　涼　福本鴻介
原金太郎　山野史人

【会場】　新国立劇場　小劇場　（京王新線　新宿駅より1駅、「初台駅」中央口直結）

【公演日程】　2019年10月3日（木）～20日（日）

【料金】　A席6,480円、B席3,240円、Z席1,620円（税込）
※消費増税にともない 10 月 1 日以降料金が変更される場合がございます。

【チケット申し込み・お問い合わせ】
新国立劇場ボックスオフィス　TEL：03－5352－9999（10:00～18:00）
新国立劇場Webボックスオフィス　http://pia.jp/nntt/

＊Z席1,620円　公演当日10時よりボックスオフィス窓口で販売。1人1枚。電話予約不可。＊当日学生割引　公演当日残席がある場合、Z席を除く全ての席種について50％割引にて販売。要学生証。電話予約不可。＊新国立劇場では、高齢者割引（65歳以上5％）、障害者割引（20％）、学生割引（5％）、ジュニア割引（中学生以下20％）など各種の割引サービスをご用意しています。